

# 幼児の連想の比喩的カテゴリー化と発達

—— 縦断的研究：モデルと発達傾向 ——

鈴木 情 一

(平成5年10月28日受理)

## 要 旨

幼児の連想は幼児の「認知と思考」の型を表し、その型は「比喩及び一部のレトリック」の類型を通して分析が可能である。本研究はこうした前提の上に立ち、1人の幼児の連想反応を3年6カ月にわたって収集し、それらを比喩的類型として分類し、その発達傾向を検討するものである。

その第1段階として、本研究では「比喩の類型化」及びその「認知的意味」を提案し、それらの結果にもとづいて幼児の「(名詞的) 連想」を分析するための理論的検討をおこない、モデル化の可能性を模索した。

## KEY WORDS

association 連想

infant

幼児

metaphor 比喩

longitudinal study 縦断的研究

## I. 関連する諸問題の文献的検討

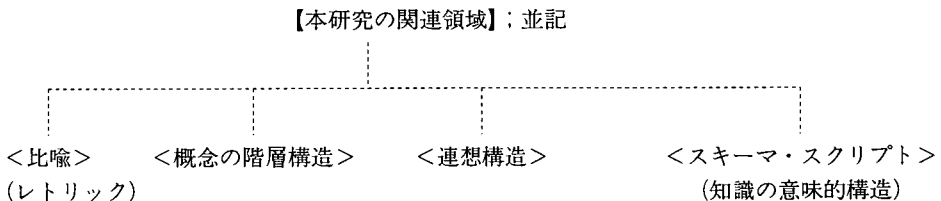
幼児の連想反応（ネットワーク）は刺激語の意味構造を表現するものである。と同時にそれぞれの反応（類型）は幼児の認知と思考の型を表すものであり、それは（広義の）「比喩」及び「レトリック」の（下位）類型を通して分析・類型化が可能である。視点を変えて言うならば、比喩及びレトリックの類型と幼児の連想反応はともに認知と思考の型を表すものであり、その意味で幼児の連想反応は比喩及びレトリックの類型として分析・検討が可能である。これが本研究を支えるテーゼである。

本研究の目的をステップ方式で明らかにしておく。本研究の目的は、

- ① 幼児の（名詞）「連想」反応を分析することを目標として、「比喩」及び一部の「レトリック」の類型化を図ること、
- ② それらの「比喩」及び「レトリック」の下位類型を、「認知・思考」の型として把握すること、
- ③ 幼児の「連想」をそれらの比喩及びレトリックとして類型化すること、
- ④ 類型化された連想反応の「発達の傾向」を、1人の幼児（及び比較児童）の縦断的データをもとにして構築・提案すること、

の4点にある。

本研究を分析的にみた場合、その背景となる研究領域は3つに分類することができる。それらは「比喩」、「連想」、そして「階層概念」に関する研究である。さらに、最近の認知心理学に関連づけるならば、「スキーマ」、「シナリオ・スクリプト」が挙げられる。



まず「比喩」であるが、本研究の背景をなす比喩理論は佐藤(1978, 1981, 1987)と瀬戸(1986)によるところがおおきい。

「換喩・提喩・隱喩」の区別については、瀬戸の「現実世界」に関する「換喩」、「意味・概念世界」に関わる「提喩」、そして両方の「世界」を往復する「隱喩」という区別をふまえている。さらに詳細なる類別については佐藤の概念に準拠している(→定義を参照)。ただし、佐藤に対する中村(1986)の批判に代表されるように、比喩の類型化については依然として多くの問題があることを忘れてはならない。

幼児・児童期における比喩の問題については「理解」に焦点をおいて岩田(1991)にまとめられているが、焦点が「理解」をみる「実験的検討」にあるところから、本研究との関連はうすい。「産出」(自発的表現)の面では「見立て」や「ふり」との関連で論及されている。発達的な研究に絞ってしてみると、Billow(1981)、Winner(1979)がその代表的なものである。Billowは「比喩意識」(「例えている」という意識)を検討し、Winnerは自発的発話の比喩の類型化を試みている。鈴木(1986, 1992)はそれらの研究を「標識」の類型化、「基盤」の類型化という点でさらに追究している。

産出的研究の要点は、幼児の「見立て・ふり」が「比喩」の原初的形態であること、2歳児でも「比喩意識」が認められることの2点である。

「連想」に関しては歴史的にさまざまな観点から多くの研究が報告されている。特に1970年代にさまざまな観点から多くの学会発表がなされている。その中では、例えば、刺激語(その指示対象)と反応語(その指示対象)とを結び付けるカテゴリーがこれまたさまざま提案されているが、かなり「恣意的」なものが多く、理論的モデルを背景においた組織的なものではない(例えば、「例示」、「印象」、「類似」等、落合他, 1977)。従って、こうした研究には言及しないことにする。

最近の研究で「連想」と比喩(及び、スキーマ・スクリプト)との関係に着目しているのは楠見(1991, 1992)である。この研究については後述する。

本研究は特に「提喩」との関わりで刺激語と反応語との「ハイアラーキー」構造にふれることになる。そこで、幼児・児童の「階層的概念」の構造及び発達に関する研究の内から、最近のものに限ってその要点を要約しておくことにする。

全国的な規模で幼児・児童の連想語を収集したものが国立国語研究所(1981)の調査である。

この調査では3歳児から小学校4年生（一部成人を含む）の連想語彙が収録されたが、刺激語が「上位概念」（例えば、「動物」、「魚」、「楽器」等）であり、方法論的にみると、上位概念から下位概念を求める「制限連想」であり、内容的には「概念の階層構造」の一部分（「種」の提喩）を連想によって明らかにしたものである。

守屋他（1987）では児童・青年（小学生から高校生まで）を対象として「シンタグマ・パラディグマシフト」の過程構造を追及するための基礎調査をおこなっている。特徴は2点にまとめられる。1つは、刺激語が「名詞」、「動詞」、「形容詞」類と多様である点。2つめは「反応の分類カテゴリー」が5つに類型化されている点である。その類型とは「慣用句型」、「分離型」、「説明型」、「矛盾対等型」、「反対対等型」の5つである。以下に示す類型と比較すると、目的は異なるが、かなり概括的な類型である。

土居（1986）はカテゴリーに3水準の階層構造を設定し、それぞれの水準に属する語彙を正しく使用することができるかどうか（「カテゴリー水準の識別」と「同位カテゴリーの認知」）を、「命名」反応を課題とし、小学1、3、5年生を対象として検討している。その結果、1年生、3・5年生、そして（参考とした）成人との間に差異が認められた。「反応過程」と「命名過程」を区別する考察をおこなっているが、1年生では「命名の等位」反応が困難であることがわかった。

幼児から児童にわたって「階層構造」の理解を実験的に追及しているのが湯沢（1990、1991）である。

幼児を対象とした湯沢（1991）では、「ゲーム課題」を「状況」として採り入れ、そうした状況によって命名水準の「適・不適」判定が促進されるかどうかを検討している。

正答率は年齢、対象物の種類（自然物と人工物）及び課題（設定状況）によって異なるが、おおむね課題（状況）の効果が認められた。4歳児では同一対象を「基本語」レベルと上位語レベル（「馬」に対する「動物」）で同時に認識することは不可能であるが、「課題」によっては可能となる幼児がごく少数ではあっても存在した。同じことは5、6歳児でも困難ではあるが、上位カテゴリーの特徴を顕示したり、併置したりすれば、上位語による表現が適当であるとの判断が可能となることが明らかになった。

湯沢（1990）では、児童について、その学習効果を判定基準として階層構造の理解を実験的に追究している。その結果についてだけ言及する。小学校1年生の場合、同一対象を水準の異なるカテゴリーに同時分類することが困難であり、階層構造の知識の利用が限定される。4年生では階層構造が指導・学習されると、分類が可能となる。そして6年生では階層関係を推論し、その上で同時分類できる。

その他、「カテゴリー構造」をその「プロトタイプ性」という観点から追究した研究もあるが、省略する。

比喩を知識の意味構造（概念の意味論的ネットワーク）との関連で追求しているものの代表的なものが山梨（1988）と上述した楠見（1991、1992、他）である。

「スキーマ・スクリプト」との関連で本研究とその背景を共有する研究として楠見（1992）を取り上げておく。楠見の研究は比喩の生成や理解が「意味構造」（「スクリプト的意味」、「情緒・感覚的意味」、「カテゴリー的意味」）によって支えられるものであることを「連想」データをもとにして説明するものである。その背景にはレイコフ（1993）がある。彼の提案（対応関係）を図式化して示すと次のようになる。

レイコフ	楠見
①「命題モデル」	⇒①「スクリプト的意味」
②「イメージ・スキーマモデル」	⇒②「情緒・感覚的意味」
③「換喩モデル」：換喩 ：提喩	⇒③「シーンのスクリプト的意味」 → 「カテゴリー的意味」
④「隠喩モデル」	⇒④「情緒・感覚的意味の写像過程」

なお、「情緒・感覚的意味」には「類似関係」と「顕著性」,「スクリプト的意味」には「隣接関係」と「利用可能性」が、最後に「カテゴリー的意味」には「包含関係」と「典型性」とが「制約」として機能しているとしている。

楠見の研究は「連想」を解明することを目的としたものではなく、各種の「比喩」をその背景をなすこれまた各種の「意味構造」と関連づけることを目的としている。本研究は連想構造の追求を主たる目的とし、その分析・類型化を思考・認知の「型」を反映した各種比喩によりおこなうとするものである。さらに、具体的なデータをその出発点としている点にも特徴がある。

問題を絞ろう。

山梨と楠見(1991)では「知識の意味構造」の中で概念間を結び付けている「リンク」に「連想リンク」と「換喩リンク」,「提喩リンク」を区別している。楠見によると、文脈・状況が知識の中の連想リンクを制限して、換喩リンクや提喩リンクを活性化し、反応語(その指示対象)を喚起する、と言う。疑問点の1つは、「子ども」の場合、「連想リンク」と「換喩リンク・提喩リンク」とが区別できるのだろうかという点にある。さらに、「産物」としての「比喩」や(連想における)「反応語」よりもむしろ、彼らの言葉でいうならば、「リンク」こそ重要であり、リンクの型としての「換喩」や「提喩」は「思考の型」を表現しているのではないか、という点である。比喩「理解」の過程やその産物ではなく、その産出過程を「連想」の中に探ることが必要である。

幼児の連想の型はその認知・思考の型を反映し、認知・思考の型はレトリックの中の特に比喩の型によって把握することが可能なのではないか。本研究はその試論的意味をもつ。

本研究の目的は「幼児の連想とその発達的变化」を追求することである。連想を比喩的に類型化することによって、比喩に反映されている認知・思考の型及びその発達的变化を追求することにおく。

## II. モデル構築の背景をなす観察データ

本研究は約3年6カ月の間収集した1人の幼児のデータを分析し、幼児の連想を比喩的に解明しようとするものである。が、データの分析は後稿に残し、その背景となるモデルやカテゴリーの提案と理論的検討をおこなうものである。観察方法とデータについてその要点を記述しておく。

**観察方法：**1人の幼児の連想反応をその日齢で1370日齢から2676日齢にわたって収集した。刺激語は名詞に限定した22語である。反応語は第3連想まで記録した。記録は隔週単位で実施

され、データの延べ総数は約5700語になる（無反応のためデータの一部を欠くことになった）。

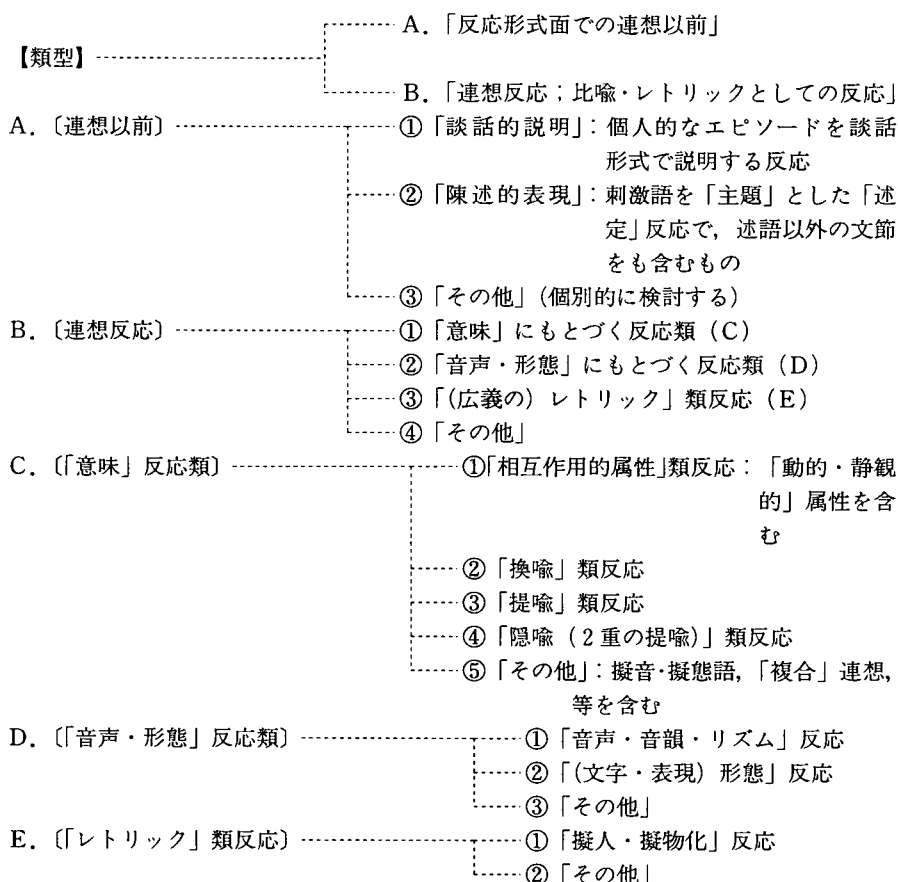
なお、幼児期から児童期にかけてのデータを収集する目的で、対象児の姉2人の反応語も同時収録した。次姉は2045日齢から3723日齢まで、長姉は3258日齢から4932日齢である。反応語の延べ総数は対象児よりも多くなる。

本研究では対象児及び次姉の一部のデータを使用し、理論的検討及びモデル構築、さらに発達傾向を提案するための素材とする。大学生のデータも収集してあるが、対象外とする。

### III. 比喩のカテゴリーとその認知的意味

ここでは連想反応をカテゴリー化するために使用した「比喩」の類型とレトリック技法を紹介・解説し、その認知的意味を提案する。

#### 1. マクロ類型



注1. 例えば、「擬音語・擬態語」反応や「擬人化・擬物化」反応等では類型が一部重複する

ことになる。

2. 第2, 3次連想反応の場合, その「反応の仕方」と類型(化)が新たに問題となる。
3. 対象が幼児(・児童)であることから, 彼らのとっての「基本語」水準を設定し, それ以外は「(比喩的に)拡張された」反応として区別する必要があるだろう。
4. 「相互作用的属性」反応は, 発達的にみて後に「隠喩」の「類似性」に繋がる属性であると考えられる。

補足. 上記の問題やその他の問題の処理の仕方については後述する。

## 2. カテゴリーとしての「比喩の類型」と関連するレトリック反応

### (1). 「換喩」について

①「換喩」類反応: 佐藤(1978, 1981)及び瀬戸(1986)を参考に, 換喩の定義とその特徴とを略述する。

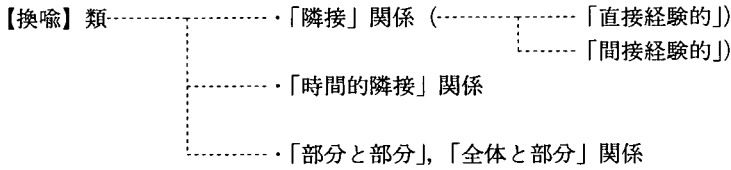
- (a). 「現実的・経験的世界」をコンテクストとして要求する反応(関係)である。現実的・経験的世界とは佐藤(1978)と瀬戸(1986)による。
- (b). 現実的・経験的世界における, 広義の「隣接」関係を反映した反応と,
- (c). 現実的・経験的世界における, 「部分と部分」, (ものにおける)「全体」とその「部分」との関係を反映したものである。
- (d). 認知的には, 「視線の焦点移動」や「視点の相対性」(佐藤, 1987)を反映する反応である。
- (e). 現実的・経験的世界における, 「時間軸にそった」同一事象の変化, 異なる事象間の関係は「時間的換喩」とする。

注1. 「位置的隣接性」(構文的隣接性)(瀬戸, 1986)をも「換喩」類に分類する考え方もあるが, 慣用句等を除くと, 認知的には「対象との相互作用」を反映する反応(例, 「犬」→「走る」, 「汚い」)であり, これらは後に「内包的特性」を形成し, 隠喩等の基礎をなすものであり, 換喩には含めない。

2. 「広義の『隣接関係』」は物理的な関係だけではなく, 「経験的」なものである。意味論的ネットワーク上では1つの「リンク」を共有する, と定義されよう。素朴に定義するならば, 「意識の上で『密接な関係』を有するもの同士の関係」となる
3. 「全体と部分」の全体・部分は認知上「ゲシュタルト」的に分節されたもの, と定義しておく。
4. 「意味・概念世界」における「全体と部分」との関係は「提喩」に属する。
5. 「時間的換喩」と「時間的提喩」については, 後述する。

換喩の定義は未だ(不十分な)「示差的定義」の段階にある。提喩や隠喩との差別化を図っているに過ぎない。認知と言葉の「相対性」をふまえた上で, 人間の思考と認知のある種の「型」を表現するものとしての定義が必要である。

②連想のカテゴリーとしての「換喩」の下位類型：次のような下位類型を設定する。



注1. 換喩の事例としては一般に「部分で全体」,「製造者で製品」,「場所で出来事」,「公共機関で代表者」等(レイコフ・ジョンソン, 1986)が挙げられる。これらは「知識」に属する。しかしながら, 幼児・児童期初期の連想反応ではこれらの反応は少ない。例, 「学校」→「先生」, 「学校」→「勉強」。幼児・児童期初期の反応においては「直接経験的隣接」反応(「ノート」→「鉛筆」, 「机」→「椅子」)が多い。「知識」として得られた経験的隣接反応(「間接経験的隣接反応」)と対にして, 下位類型として設定することにする。

2. 「学校」→「勉強」といった反応は, 児童期後期でも「勉強する」といったいわゆる「シンタグマティックな」反応の形をとることが多い。経験的に密接なものは「自己」を含む「認知の場」が導入され, それが「～する」といった動詞形(シンタグマティックな反応)として表現される。それが「勉強」という形をとるようになるのは, 指示対象事象が対象化され, 「心的に距離をおいた見直し」によって実現されることと関係が深い。もちろん, 「連想」という課題の形式への順応も関係する。

③「換喩」の認知的意味: 「隣接関係」による換喩の発生的起源は本来直接に経験される対象間の「視線によって媒介される」(見直しによる)関係にあるもの・ことによる反応である。それらはすでに「空間的な隣接」はもちろん, 「機能的な」関係を前提としている。それらの関係は「産地と産物」といった「拡張された経験領域」(レイコフ, 1993)にも適用される。時間的な隣接関係にあるもの・ことの間でも同様の理解が当てはまる。

「全体と部分」の関係もある意味では「隣接関係」であり, 見回しの関係である。が, ある全体とその部分としてゲシュタルト的に分節されるもの・こととの関係としておく。

見直しにおいては認知主体としての「私」自身は背景に消え(幼児期では「私」を通じて動作的・機能的に結合・統合されている), 対象となるもの・こと(及び, その部分間)の関係が対象化され, 検索の対象となる。

そこには, 換喩が「認知と表現の経済性」(瀬戸, 1986)を機能的に実現する装置の1つであることも関係している。

(2). 「提喩」について

①「提喩」類反応: 同じく佐藤(1978)と瀬戸(1986)とを参考にして, 本研究に関わる要件を箇条書きにしておく。

- (a). 「意味・概念世界」における関係の表現である。
- (b). 「意味・概念的ハイアラーキー」(「包含」関係又は「全体と部分」の関係),

- (c). 「抽象的属性」や思考・認知を規定する「メタ的属性」,  
 (d). 意味・概念世界における「記号化」や「記号的特性」に関わる。

注 1. 他に「時間的提喩」が含まれる。

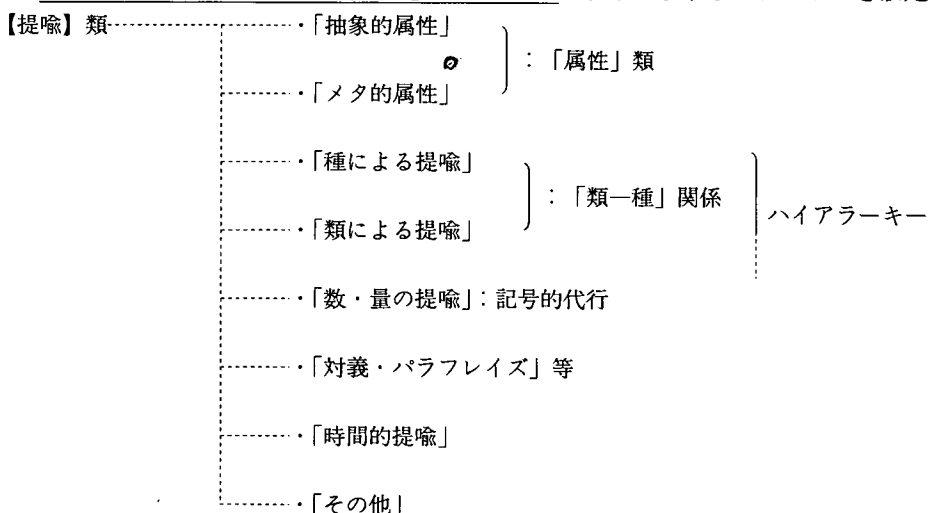
2. 時間的提喩を除くと、「包含関係」, 「抽象的属性」, 「ことば・記号」に3分割される。
3. 「ことば・記号」の「ことば」については, i). 常套句, CM 等の表現, 慣用句, 諺といった反応語を喚起する場合, ii). 「対義語・反対語」, 「パラフレイズ」を想定している。但し, 「音声等」にもとづく連想反応 (例えば, 「音喩」) と重複する (「天才」→「天才バカボン」) 場合もあり, 問題が多い。なお, 「天才」→「天災・転載」は「音喩」として「音声・形態」連想反応に含める。
4. 同じく, 「記号」については, いわゆる「数の提喩」を含め, 「数・量の提喩」とし一種の「記号的代行」反応とみなす。

グループ・μ (1970) により提出された「Σ 様式」と「Π 様式」という類別を, 佐藤が「意味の分解」と「現実の分解」という形式で再定式化して以来, 「意味・概念世界」に関わる「提喩」と「現実・経験世界」に関わる「換喩」との区別は比喩研究において1つの定式となった。

同じ「全体と部分」の関係も, 意味・概念世界では集合論的に外延と内包に規定される「類」と「種」としてとらえられ, 換喩における「部分で全体」, 「全体で部分」とは区別される。この「類・種」は「概念的ハイアラキー」を前提としており, そのハイアラキーにおける「上向」, 「下向」としても表現されている。

提喩に関してもその定義・範囲等に多くの問題が累積している。ここでは以下のような下位類型によって「操作的に」定義していくことにする。

②連想のカテゴリーとしての「提喩」の下位類型：以下のようなカテゴリーを設定する



注 1. 「抽象的属性」は, 「意味・概念世界」においてのみ「分節・実体化」することのでき



- る属性とする。「茶（色）」、「丸い（形）」、「大きい（サイズ）」である。「嫌い」、「走る」、「冷たい」等は「相互作用的属性」とする。
2. 「メタ的属性」とは、認知・思考のカテゴリー自体に言及するもので、「色」、「種類」、「品種」、「重さ」といったものがその例である。
  3. 「種」の提喩、「類」の提喩は、それぞれ、刺激語の下位概念、上位概念を反応語として提示したものとする。
  4. 「数・量」の提喩は、「3頭」、「10kg」といった高度に抽象的な記号としての数量化を経たものである。
  5. 「対義（反対語）」、「パラフレイズ」等は、刺激語が名詞であることから生じにくい、「重い」→「軽い」、「犬」→「ドッグ」等が例として挙げられる。
  6. 時間的提喩については後述する。

③「**提喩**」の認知的意味：3種類に分けて考える。「抽象的属性」類では、本来対象から分離することのできない「属性・特性」を、意味・概念世界におき、ことばによって分節化・実体化し、時には「空間化」して分離・操作する認知的操作の産物を示すものとする。

「類・種」の提喩は同じく意味概念世界において抽象的な「概念的ハイアラーキー」を構築し、そのハイアラーキーの「階段」を心理的焦点が移動（上向，下向）する操作を前提とする。下位の概念から上向して「包括」したり，上位の概念から下向して「個別」化したりする操作・移動である。

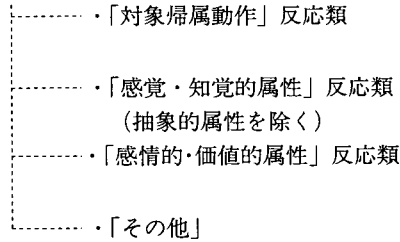
「ことば・記号」は、意味・概念世界を前提とした「ことば」相互の関係や高度に抽象的な記号による代行・代理・置換の操作の産物を指すものである。

### (3). 「相互作用的属性，又は提喩以前反応」について

①「**相互作用的属性**」**反応類**：従来，名詞連想に対する「シンタグマティック」な反応という名称を与えられてきた反応は，刺激語に対してその「述語・述部」を提供し，「文」の形態を生成するものであった。しかし，「述語」を与え，文の形態をとる反応とは，言語心理学的にみるならば，「陳述」であり，話し手の主体的な統括作用がおこなわれるものである。従って，これらの反応は，「主体（としての対象者）と対象事象とが同一の認知の場におかれ，その相互作用の結果として生じる・認知される特性」であり，レイコフ（1993）のいう「相互作用的属性」である。これらの相互作用的属性は後に「提喩」や「隠喩」の内包的意味を形成することになるものであり，「提喩」（ひいては，2重の提喩としての隠喩の）の原初的形態をなすものでもある。この意味では，「抽象的属性」もある意味での相互作用的属性である。しかし，それらは「静観的認知」の結果的産物であり，「反応性・動作性」を有する以下のような類型とは区別しておく。これらは，言語化された「感覚運動的反応」である。

②連想のカテゴリーとしての「提喩以前」反応類の下位類型：以下のカテゴリーとなる。

【提喩以前】	-----	・「主体帰属動作」反応類
(相互作用的属性)		

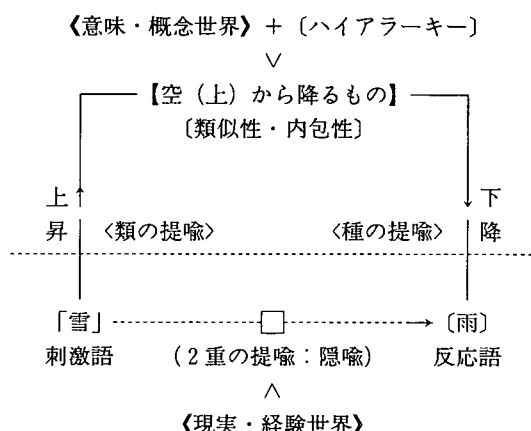


- 注1. 対象との相互作用によって、主体に喚起されるその意味で当該対象に特有の動作・行為・操作(の図式的反応)の類を指すのが「主体帰属動作」反応である。同じ相互作用で主体にある種の反応を喚起するが、むしろ対象自体の動作・運動・行為等として認知されるものを「対象帰属動作」反応とする。この類型化は想定される「認知の場」において、主客の分離を前提としているが、むしろ「連続的」であると考えられる。「主体」の例としては、「本」→〔読む〕,「橋」→〔渡る〕等が挙げられる。「対象」では「犬」→〔吠える〕,「葉」→〔落ちる〕等がその典型例である。
2. 「帰属動作」反応類においては、少なくとも幼児・児童期初期の反応には、「対象一般」に適用されるもの(例、「本」→〔買う〕,「本」→〔見る〕)と、もちろん、相対的ではあるが、当該対象に(限りなく)「固有」の反応とが区別される(例、「本」→〔読む〕,「葉」→〔枯れる〕)。それぞれの反応類に「一般」と「固有」とを下位類型として設ける必要がある。
3. 「感覚・知覚的属性」は、同じく相互作用の中で、一般に対象の属性として知覚されるものである。例えば、「雪」→〔冷たい〕,「石」→〔固い〕,等。感覚様相別にみると、視覚の場合抽象的属性が多く、この感覚・知覚的属性では視覚以外の特性・属性が多い。なお、擬態語(擬音語)を除く。
4. 対象との相互作用によって喚起される反応類の中で、「怖い」,「悲しい」,「楽しい」といった感情的反応と「好き」,「嫌い」に代表される価値的反応(判断)を「感情・価値的属性」に含める。感情と価値とは完全に類別することが困難である。

③「相互作用的属性」(提喩以前) 反応の認知的意味: 相互作用という表現が示すように、主体と対象とが向かい合う「認知の場」を設定することによって認知される主体(&/or) 対象の属性(反応)である。主体に喚起される反応類を(主体の)「動作・操作・運動等」と「感情・価値」とに分ける。なお、対象に帰属される(対象において認知される)ものは(対象の)「動作・運動・行為等」と「感覚・知覚」とに分けてある。対象の「周辺的環境」やその環境内の事象に言及する事例は除外される。

#### (4). 「隠喩」反応について

- ①「隠喩」類反応: 比喩論においては隠喩は「類似性」によって定義されるのが通常である。精神分析の領域では、換喩の「置換」に対して「圧縮・融合」がその特徴とされる。本研究ではグループ・μ(1970)と中村(1986)とに準拠して、隠喩を「2重の提喩」として定義する。2重の提喩とは「類の提喩」と「種の提喩」をこの順序で連続的に適用することによって産出される比喩の意味である。(下図を参照されたい)。
- (a). 「隠喩」は「2重の提喩」として定義される。その含意は、意味・概念世界と現実・経験世界とを往復する移動(瀬戸, 1986; 佐藤, 1978)と概念的ハイアラーキーを前提として

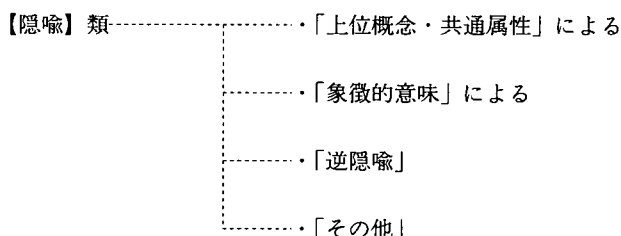


いる点にある。

(b) 「類似性」にもとづく比喩である。類似性には「形・色彩・機能」等といったものから「抽象的・内包的」なものまでが含まれる。

この2点を隠喩の特徴としておく。

②連想のカテゴリーとしての「隠喩」の下位類型：次のような下位類型を設ける。



注1. 「隠喩」の判定は操作的に厳密に定義しようとする問題が生じる。例えば、隣接性や部分にもとづく換喩との判別1つをとっても幾つかの問題が生じてくる。「犬」→「猫」という連想反応を事例として取り上げ、検討を加える。

「換喩」の場合：犬と猫は幼児の周囲によく認められる動物である。日常生活での隣接的経験の結果として、猫が反応語となることは不思議ではない。

「隠喩」の場合：犬と猫は形態上でもよく似ている。従って、「形態」的特性が「基盤」(Ground)となった2重の提喩である。同じく、犬、猫の上位概念としての「動物」(さらには、より上位の生物等)が基盤となった2重の提喩も考えられる。

2重の提喩としての隠喩の判別は、刺激語(その指示対象)と反応語(その指示対象)とを「類似性・共通性」において結びつける「コンテキスト」とその類似点とを見つける方法による。しかし、「類似点」は「任意の数だけある」(渡辺, 1977)のである。

「動物」といった上位概念を基盤とする隠喩の場合では、「類」の提喩が出現した場合を発達上の基準とし、それ以後の2重の提喩を隠喩と判定する手続きが考えられる。同様に、形態・属性等にもとづく2重の提喩としての隠喩もその形態・属性等がすでに反応として

出現している場合を基準とすることが考えられる。しかし、この基準は幼児の認知・言語の発達をみると厳しすぎる。例えば、鈴木（1986, 1992）では、3歳以前にさまざまな基盤やその表現が出現している。

しかし後出するデータをみる限りでは、幸いなことに「隠喩」の出現は対象児ではごく少数しか認められず、ある程度恒常的に出現するのは比較児Bにおいてである。さらに、反応類型によって発達に順序性が認められることがわかった。

ここでは出現時前後の反応事例を（発達上の）コンテキストとして勘案した判定法を導入する、ということで満足しておく。さらに「同属性」をも付加的な基準として導入することができる。「犬」と「猫」の関係は「犬」と「スパイ」とは異なり、「同属」関係にある。同属関係にあるもの同士は上位概念を共有するか、常識的な特性を共有する2重の提喩としての隠喩反応である確率が高い。

2. 「上位概念」又は「共通特性」の類型としては「雪」→＜白い／白いもの＞⇒〔綿飴〕, 「犬」→＜動物＞⇒〔豚〕, 「猫」→＜4つ脚＞⇒〔犬〕, 「机」→＜載せるという機能＞⇒〔テーブル〕, 「豚」→＜嫌い＞⇒〔毛虫〕等が考えられる。いずれも「犬」→＜人の行動を密かに探る・・・＞⇒〔スパイ〕, 「ピンク」→＜艶めかしさ＞⇒〔・・・〕のような「高度に社会的な象徴的意味」とは区別される。前者を「上位概念・共通特性」による隠喩とし、後者を「象徴的意味」による隠喩として区別することにする。
3. 「逆隠喩」については、後述する。

③「隠喩」の認知的意味：隠喩の基本的意味は、少なくとも幼児・児童期初期では、「見知らぬもの・ことを、既知のもの・こと（のイメージと言葉、身体等）で代理的に表現する」ことである（鈴木, 1986, 1992を参照されたい）。いわゆる「見立て」, 「ふり」に代表される象徴的機能の実現である。もちろん、表現の中には「扱う」ことも含まれる。こうした認知的意味を一言でいうならば、「～として／～ような／～みたい」の認知であると言える（参考：尼ヶ崎, 1991）。

隠喩の機能について幾つかを挙げる。

- ・「無形の有形化」：佐藤（既出）のいう「造形的認識」とその表現にあたる。無形のことを言葉によって分節化、実体化し、言葉（概念）の世界に位置づける。
  - ・「未知のものを既知で表現」：「たとえ」の意識である。臨時の・仮のという意識を伴う場合が日常生活での使用法である。
  - ・「鮮明化」：不鮮明なものを、ある側面に焦点を当てて鮮明なものとする。対象のある側面を浮き彫りにすることでもある。印象づけの効果もある。
  - ・「芸術的造形」：美的造形である。
- 前提となる事項がある。
- ・「例えるもの」と「例えられるもの」とは異なるものである、との認識がある。
  - ・すでに共有されたイメージ・概念に訴える。基本的にはその典型的イメージに依存するが、潜在的に発掘される場合もある。
  - ・ある一定の観点から照射された「もの」の特性が問題とされる。

隠喩の定義づけは困難を極める。ここでは連想との関わりに限定してその認知的意味をを模索してみる。

基本的な意味は「例えられるもの」を「例えるもの」のイメージを通してみることであり、そして「例えるもの」(のイメージ)は意味・概念世界に存在する。ある人物の性格・行動特性に関する比喩的表現を考える。「人物」→<冷たい野郎だ>と「人物」→<氷>とを比較する。前者の「冷たい」も感覚的意味を比喩的に拡張した表現であり、その意味では(*dead*)「比喩」である。が、後者と比較すると、「隠喩」性を感じさせない。人物のイメージ造形において、「冷たい」が「感覚・知覚的な属性」(その比喩的拡張による表現)にたよってとらえているに対し、「氷」はその属性を現実的・経験的世界において(典型的に)実現する「もの」にたよっている。前者は提喩的であり、後者は隠喩的である。いずれにしろ、イメージは意味・概念世界に存在する。提喩的認識・表現が意味・概念的な対象(の特性等)の把握であるとするならば、隠喩的認識・表現はその特性を現実・経験的世界において実現することにたよる認識・表現である。

隠喩の「類似点・共通点」は、「類の提喩」により意味・概念世界内に入り、そこに喚起されたイメージを実現するものとして具体化された既知の対象(その表現)と、所与の対象との間に発見されるものである。隠喩の生成も理解も、常に(再)発見と造形とを伴うのである。

#### (5)「時間的換喩・時間的提喩」について

①「時間的換喩・提喩」反応：楠見(1992)は隣接性に「空間的隣接性」と「時間的隣接性」を区別し、時間的隣接性を支える背景としてのスクリプトとの関係を論じている。が、時間的提喩と時間的換喩との区別については言及していない。彼の言う時間的隣接性は「時間的換喩」であり、「全体」としてのスクリプトの部分となす2つ(以上)の出来事間の「並列的」、つまり同水準上の「部分と部分」との関係である。

川本(1987)は時間的換喩と時間的提喩とに区別をもうけてはいるが、いささか曖昧であり、参考にならない。本研究の背景をなす比喩論とは異なる理論に依っている。

これまでの議論の延長線上で論じるならば、時間的提喩と時間的換喩の区別は、それが現実・経験的世界での関係か、意味・概念世界での関係かということになる。時間的に隣接する2つの出来事のそれぞれについて、それが現実的世界のものであるか意味・概念世界のものであるかを区別することが必要となる。

ここでは意味世界を「ハイアラーキーを要求する」と読みかえて考えることにする。

整理すると、時間的換喩を認定する要件は、「時間的な連鎖図式(スクリプト)」と「同水準の」部分と部分との関係である。時間的提喩のそれは、「時間的な連鎖図式(スクリプト)」と「ハイアラーキカルな」部分と部分の関係である。

表現より想定される「全体」的事象に対して、その(ゲシュタルト的に)「分節化」された「部分や属性」間の関係は、「時間性」(時間的前後関係及び同時関係)を明示又は内在した関係とそれを欠如した関係に大別することができる。なお、「全体と部分(属性を含む)」の関係は時間性(意識)を欠如したものが多い。

この問題は認知・表現における「継時的総合」と「同時的総合」(無時間性)の問題でもある。例えば、「右手を挙げて賛成した」の「右手を挙げる」と「賛成する」との間には、一方が動作の描写であり、他方がその「意味的」表現であり、一般に無時間的な表現として受け取れる。これは *Perspective* 又は *Mental space* の変更を含む認知・表現の例でもあ

る。

「食事の前に、手を洗いなさい」という表現では、*Mental space*を設定しての表現ではあるが、「食事」と「手を洗う」との間には、「～の前に」という表現の効果もあって、時間性意識を感じ取れる。

同時的総合の例としては「青くて丸い積木」といった認知・表現が典型的である。語順や顕著性といった観点を省くならば、「青い」(カテゴリー「色」)と「丸い」(カテゴリー「形」)との間では時間性が感得されない。いや、時間性を捨象して理解する必要がある。なお、幼児では「青いの(積木)」→「丸いの(積木)」といった継時的表現に分解して表現する傾向が認められる。

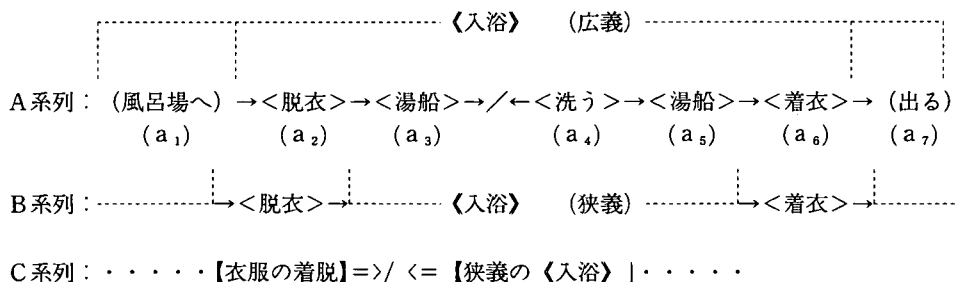
目的論的意識を表現する「(肉を)たたいて、やわらかくする」といった表現では時間性を感じる場合もあれば、感じない場合もある。「やわらかい」という時間的に「先の」目的を意識して、その目的のために「たたく」と解することもできる。「たたく」という1つ1つの動作が「やわらかくする」という意識を同時に表現しているともとれる。さらに、「たたく・やわらかくする」をセットにして繰り返し、「やわらかい」という意識内で先行する目的実現に向かう、との時間性を意識することもできる。

これらの例が示すように、時間的換喩と時間的提喩に関しては事前に考えなければならないことが多いが、ここでは「事象」を単位としたスクリプトを想定して考えていく。

簡単な事例を提案・考察してみる。

例えば、《入浴》とでも名付けることのできるスクリプトの場合、その「部分」は例えば「脱衣」、「湯船につかる」、「着衣」といった「部分」の、しかも時間的に順序づけられた行動・動作から構成されている。

目的にそって簡略化した《入浴》というスクリプトを考え、それにそって考える。



注1. 「→」: 時間的前後関係

2. 「→/←; =>/<=」: 時間的前後関係欠如・喪失

系列Aのように、「基本動作単位」に分節(分解)された「部分」にあたる動作(脱衣、洗う等)の間の関係は、a<sub>2</sub>とa<sub>3</sub>のように明確な順序関係を内在している場合であれ、a<sub>3</sub>とa<sub>4</sub>のように一部順序関係が入れ替わる場合であれ、同水準にあることもあって、「部分と部分」との「時間的隣接関係=> 時間的換喩」の関係をなす。

もちろん、B系列の「(狭義の)入浴」(名称がない)と基本的な動作単位<脱衣>との関係も時間性を含み、「(広義の)入浴」との関係で双方ともに「部分」をなし、時間的換喩の関係

であると言えよう。この場合の「(狭義の) 入浴」の意味は佐藤 (1987) の言うように「意味が収縮」しているが。

では、「(広義の) 入浴」とその部分的単位としての「着衣」との関係はどうであろうか。この場合は「全体一部分」の関係であるが、「時間性」は含まれない。この場合も「(広義の) 入浴」の意味が<着衣>に対立するものとして意味が収縮し、<脱衣>から<風呂場に戻る>までの動作を「一括」する場合があります。この場合は「<脱衣>～<風呂場>」という単位（抽象的である）を考えると、この単位が「(広義の) 入浴」に対してその部分をなし、同じく部分をなすと同時に対立する関係にある<着衣>に「先行する」という意味で時間性が感じられる（「<脱衣>～<風呂場>」→<着衣>）。参考に、C系列では時間的前後関係は失われている。

次のように問を立て直す。①<脱衣>と<着衣>の関係、②<脱衣>と(狭義の)「入浴」の関係、①と②とはともに「時間的換喩」として分類することができるのだろうか？

その答えは②の「(狭義の) 入浴」がすでに<脱衣>や<着衣>とは異なる水準にある、つまり、「抽象レベル」の異なる上位の水準にある、という点にある。「(広義の) 入浴」と<脱衣>との関係は比較的単純な提喩的「全体と部分」の関係である（時間性が欠如している）が、<脱衣>と「(狭義の) 入浴」との関係は「時間性」を内在し、同時にハイアラーキー上での水準が異なる「部分」と「部分」の関係である。「(狭義の) 入浴」は「意味・概念」世界の事柄である。この関係を「時間的提喩」と称する。

それに対して<脱衣>と<着衣>との関係は同一水準にある部分と部分との関係である。もちろん、時間的前後関係が内在する。これが「時間的換喩」である。

言い換えると、同じ全体の部分をなすが、ハイアラーキー上の水準が異なり、時間性を内在している部分と部分との関係が時間的提喩であり、その他の特徴は同じではあるが、ハイアラーキー上で同一の水準に属する部分と部分との関係が時間的換喩なのである。

補足として、これまでの議論では「脱衣：服を脱ぐ」といった「日常的な基本動作」を単位としているが、「服」の種類や「脱ぎ方」を考えると、これ自体が「スクリプト」を成しているともいえる。

なお、従来「換喩」の事例として分類されていた「原因—結果」の関係は、「動作」と「その理由」と同じく時間的換喩に含まれることになる。さらに、例えば「テレビを見ながら、ご飯を食べる」という表現に含まれている2つの事象間の関係は「時間的同時性」を表現したものであり、これらも時間的換喩の事例である。

補足として、「(広義の) 入浴」が刺激語で<脱衣>が反応語となる場合は「出来事」における「種の提喩」の関係をなす。逆の場合は「類の提喩」である。

最後に事例を1つ挙げておく。「雪」→「雪解け」は「時間的提喩」であり、「雪」→「水」は「時間的換喩」の例である。

注. 時間的提喩や時間的換喩が第1次連想語よりも、第2, 3次連想語において出現しやすい（認定法によって）ことがわかる。関連する注意点を述べておく。

(a). 「テレビ」→「見る」は「相互作用的属性」反応・主体の反応である。

(b). 「テレビ」に対して、第1連想語「見る」、第2連想語「消す」という反応をした場合、「テレビ」⇒「消す」は相互作用的属性反応であるが、「テレビ」→<見る>→「消す」という図式を想定すると、「消す」は「時間的提喩」反応となる。データを検討す

ると、対象児の第2, 3次連想語には「テレビ」に対する直接反応をしている場合と第1, 2次連想語を意識して間接反応(行動理論的に言うならば, s(スモール・エス))をしている場合とが認められる。

②「連想のカテゴリー」としての「時間的換喩と時間的提喩」の認知的意味：「時間的隣接性」によって結合されているスクリプトの「項目」の実現(表現)過程と同じである。

#### (6) 「逆隠喩」について

「逆隠喩」反応：佐藤(1987)によると、隠喩が「類と種の提喩」によって説明されるのに対し、「逆隠喩」は「種と類による提喩」と定義される。分類の観点は「外延-内包」による。佐藤の定義を引用すると、「・・・外延的にふたつの概念が交差し(ふたつの集合は部分的に成員を共有し)ているが、内包的な規定としては本来無関係・・・」となる。彼の挙げている例を引用すると、「スポーツマン」で〔率直な男〕を、「エコノミック・アニマル」で〔日本人〕を表す場合である。

この定義法は「全体一部分：包含関係」に対して、集合論で言う「共通部分集合」的なケースがあると想定し、その対応物を比喩の世界に求めたのではないと思われる。佐藤の考察の手法は外延と内包との組み合わせにもとづいて比喩を類型化しようとする試みであった。彼の言う「内包的な規定に無関係」とは、要するに「外延」だけにこだわった分類である、との言い換えであろう。その証拠が「〔率直な男〕」、「(日本)人」という個性性への着目である。

さらに、「スポーツマン」→〔率直〕といった反応をどのように処理するか。これは「提喩：抽象的属性」である。問題はさらに「スポーツマン」が「誰でも・常に」〔率直〕という特性を備えているとは限らない、という点にある。言い換えると、「臨時的に(その都度)つくられる」属性であるということになる。「スポーツマン」⇒〔率直〕が「世界認識」になる必要はない。

本研究では、【「スポーツマン」の中には〔率直な男〕もいる】& 【「率直な男」の中には〔スポーツマン〕もいる】といった定式に書き換え、包含関係にみられるような「全体」を意識せず、その一部分から類の提喩化の過程が進行した反応であると見做す。そして、その点に1つの認知的意味を認め、独立したカテゴリーとして認定しておく。

要するに、刺激語を、外延的に見て、その一部分の所有する(と反応者が見做した)特性や属性等を備えた(と関係する)対象へと意識の焦点が移行し、それを表現する語を反応語としたものである。同時に反応語から刺激語への移行についても同じ関係が当てはまるものである。

データ内の実例としては、「犬」→〔ペット〕が挙げられよう。

#### (7) 「擬音語・擬態語」について

「擬音語・擬態語」反応：「擬音・擬態語」の類は、通常、概念化を経っていない言葉として知られている。このとらえ方については反論も見られるようだが、それに対応する表現と比較して見ると、やはり私たちの「音感」や「身体感覚」に直接的に訴えるものであることには違いない。

ここでは、幼児の連想との関係から「擬音語」と「擬態語」とに限定してその類型化と認知的意味とを探ってみる。

「擬音・擬態語」は、一般の語彙と比較して、以下のような特徴を備えている。



- (a). 「表象的なイメージ」よりも、擬音語・擬態語と慣用的に結びついている「感覚運動図式」及びその表現としての「身体（運動）」反応を喚起しやすい。
- (b). 同じく、それと慣用的に結びついている「主体」の「身体感覚」（感覚・情態・心情）を直接的に喚起する。
- (c). 「リズム性・語音の特性（音象徴的）」（シュプラ・セグメンタルな特性）がいろいろな面で比較的重要な役割を果たしている。
- (d). 「対象」自体より、むしろ対象の直感的な「様態」を描写する。
- (e). 幼児の場合では、直感的で「未分節」なイメージを表現する。

擬音語・擬態語による幼児の（連想）反応は、「対象自体ではなく、対象の直感的様態を、それに向かう私たちの『反応』特性（運動・動作、（身体）感覚）や『状況』と切り離すことなく、未分節のままに、そしてその『語音・リズムの特性』（シュプラ・セグメンタルな特性）にうって、表現する」ものである。

発達的にみれば、擬音・擬態語は幼児期初期の「原始的言語」（ウェルナー・H., 1976）であり、その特徴が表現内容の「複合性」や「描写性」にあることがわかっている（同上文献）。

反応類型上では「擬音語」と「擬態語」とを区別することができる。しかしながら、データを一瞥した限りでは発達上で順序性を認めることは困難であった。

#### (8). 「擬人化・擬物化」表現

「擬人化・擬物化」反応：幼児の認知上の特徴としての「アニミズム」, 「相貌視」に繋がる概念であり、幼児語にその表現上の事例が多く認められる。

下位類型が可能である（例えば、中村, 1977, 1991）が、ここでは触れない。

擬人化の事例は、幼児の連想の場合、「愛称」として多く出現するが、擬物化はほとんど認められない。

比喩をカテゴリーとした連想反応の類型を試みる場合、重複が問題になる。例えば、ある人物に向かって、“豚が何を言う！”といった場合を考えてみる。ここにはこれまでのカテゴリーをふまえると「（ある）人物」→「豚」という「隠喩」が含まれる。同時に、「人間」を動物である「豚」に見立てのだから、「下方向」への見立てという意味での「擬物化」がおこなわれていることになる。従って、この事例は「隠喩+擬物化」と分析できることになる。なお、擬物化の典型例は、同じくある人物に向かって“石には口がないんだ！”と言った場合などである。

幼児の連想での擬人化の事例は、例えば「ペンギン」→「ペンちゃん」などの愛称表現（幼児語でもある）が多い。こうした事例では擬人化だけであり、問題は少ない。

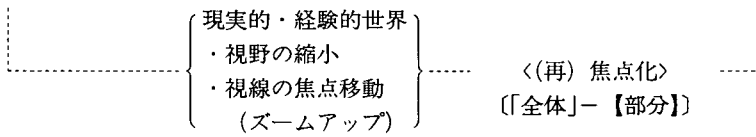
この他「換喩+愛称（擬人化）」といった場合もあり得る。必要に応じて区別することにする。

#### (9). 「音声・形態にもとづく反応」の補足事項

「音声連想・形態連想」の補足：擬音語や「言葉遊び」の場合を除くと、「記号連想」反応であり、換喩や提喩といった意味にもとづく連想反応とは区別される。連想でも刺激語の種類や反応に課せられる制限事項（例えば、できるだけ早い反応を要求する場合）によっては出現しやすくなる。

しかし、一般には、「ことばの透明性」を克服し、言葉の能記的側面に意識の焦点を向ける（メタ言語的能力）必要があるところから、幼児期には出現しにくい。



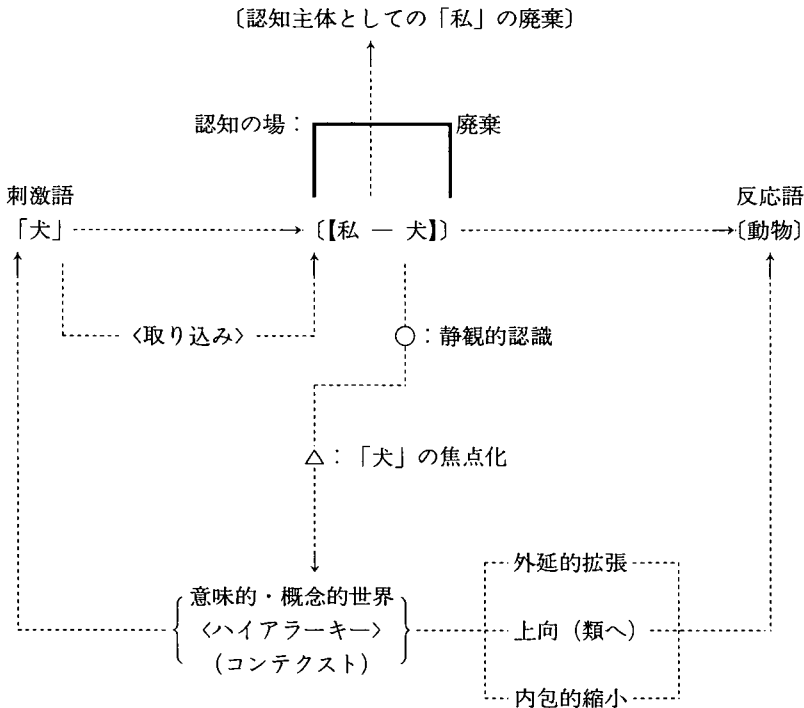


解説：刺激語「犬」はその指示対象が「私」と対峙する「認知の場」に取り込まれる。その認知の場は「現実的・経験的世界」である。「私」の意識は私のうちに向かわずに、「犬」をその静観的認識の対象として把捉する。その時点で「犬」に意識の焦点が合うことになる。

次に、犬はそれが1つの「全体」としてその内部を検索するコンテキストとなる。意識の視野が縮小し、視線の焦点がそのコンテキストとしての「犬」(の全体)を移動する。部分としての「耳」がズーム・アップされ、意識の焦点の対象となる。その「犬」という全体に対する部分としての「耳」が概念的に把捉され、表現され、「耳」が反応語として提示される。

この図式では、それぞれのステップが類型を区別する「分かれ道」になっている。

## (2) 「提喩：類の提喩」の図式



解説：刺激語「犬」の指示対象が概念として意識内に「取り込まれる」。が、「自己」と対峙する場には置かれず、「認知の場」も廃棄される。もちろん、「私」も廃棄される。

意識内で焦点化された「犬」は、意味・概念世界内で、コンテキストとしての「ハイアラーキー」内に位置づけられる。その位置（「基本語レベル」）から「上向」（上位のカテゴリ



## (1). 認知と比喩の発達的特徴（前ページの図式）

### (2). 連想の応答的特徴

- ①刺激語によって喚起される個体特異的なエピソードを談話・陳述形式で述べる。
- ②課題（応答）上の「制約」が認識され、「句・語」による反応が多くを占める。
- ③語による「陳述」反応が多くを占める。陳述的反応とは刺激語を「主語・話題」とした場合、その「述語・述部」にあたる反応であり、従来は「シンタグマティック」な反応と呼ばれたものである。
- ④「パラディグマティック」な反応が増加する。「名詞化」反応（〔読む〕→〔読書〕、等）を含む。
- ⑤「基本語」に対して「拡張された語彙」が少しずつ増加していく。

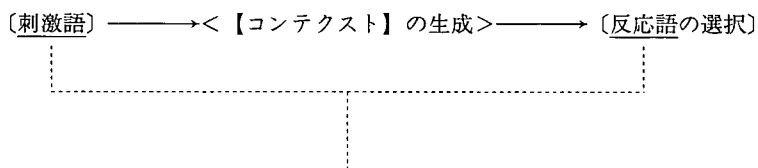
### 全体の補足

1. 幼児期の「直喩」表現は、「異化」認知の表現である。表現形式上では、「～みたい」、「～ようだ」、「らしい」、「～かなあ」、といった標識により表現されるが、こうした表現に共通の認識は、「（ある時点では）似ている／似せたけれど、異なるものだ」というものである。さらには「～のつもり」、「～として」の意識でもある。

発達的にみると、「顕著性」等にとまなう「個体特異的」な認知の表現から、「社会・習慣的」なものへ、そして「創造的な提示」へと変化・発達していく。

2. 概念上で「上位語」に属する語を刺激語とした場合（例えば、「動物」）では、反応語の大半は「その下位語（基本語）」となる。こうした「刺激語」変数についての検討及び研究は以後の課題である。

3. 「連想」を「コンテキスト」（状況）モデルとして展開することも考えられる。



{ そのコンテキスト内で、刺激語と反応語との「共存・両立」を可能とする「手掛かり」、  
及びその共存を可能とするコンテキストの下位「類型」を探索する。 }

### 要 約

当論文では「比喩」と「連想」、そして「思考・認知の型」についての理論的研究をおこなった。その要点は次のとおりである。

- ①「比喩及び一部のレトリックの技法」が「認知と思考の型」を反映していることを前提とした上で、各種比喩の認知的意味を検討した。
- ②（名詞）「連想」をそうした比喩的カテゴリーによって類型化する試みを実行した。

- ③比喩の「認知的図式表示」を試みた。  
 ④比喩としての連想の「発達傾向」を提案した。

## 文 献

1. 尼ヶ崎 彬 1991『ことばと身体』 勁草書房
2. Billow, R. M. 1981 Observing spontaneous metaphor in children. *Journal of Experimental Psychology*, 31, No. 3, p. 430-445.
3. 土居道栄 1986 「類概念における階層構造の発達—命名におけるカテゴリー水準の等位化の分析—」 教育心理学研究 34, p. 39-47.
4. グループ・μ 1970 『一般修辞学』 佐々木健一・樋口桂子共訳 大修館書店
5. 岩田純一 1991 「比喩理解の発達」 芳賀 純・子安増生共編 『メタファーの心理学』 第4章 誠信書房 p. 89-126.
6. 川本英夫 1987 「物語と時間化の隠喩」 『現代思想』 5月号 p. 80-89.
7. 国立国語研究所編 1981 『幼児・児童の連想語彙表』 東京書籍
8. 楠見 孝 1991 「連想意味論における意味連想の拡散性と創造過程」 日本心理学会第55回大会発表論文集 東北大学 p. 397.
9. 楠見 孝 1992 「比喩の生成・理解と意味構造」 箱田裕司編 『認知科学のフロンティアII』 サイエンス社 p. 39-66.
10. レイコフ・G. 1993 『認知意味論—言語から見た人間の心—』 池上嘉彦・河上誓作他訳 紀伊国屋書店
11. レイコフ・G, ジョンソン・M. 1986 『レトリックと人生』 渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和彦共訳 大修館書店
12. 守谷慶子・土田宣明・増本一浩 1987 「情報処理の為の言語的枠組み機能の形成過程について—聴覚障害児及び健常児に関する考察—」 教育心理学研究 35, p. 281-289.
13. 中村 明 1977 『比喩表現の理論と分類』 国立国語研究所報告 57 秀英出版
14. 中村 明 1991 『日本語レトリックの体系』 岩波書店
15. 中村雄二郎 1986 「記号・論理・メタファー—縦横断的考察の試み—」 新岩波講座哲学3『記号・論理・メタファー』 岩波書店 p. 1-40.
16. 落合正行・湯川良三・清水佐保子・清水御代明・矢野喜夫・岡本夏夫 1977 「子どもの連想—(5)具体的名詞に関する刺激—反応関係の分析1—」 日本心理学会第41回大会発表論文集 駒沢大学 p. 664-665.
17. 佐藤信夫 1978 『レトリック感覚』 講談社
18. 佐藤信夫 1981 『レトリック認識』 講談社
19. 佐藤信夫 1987 『レトリックの消息』 白水社
20. 瀬戸賢一 1986 『レトリックの宇宙』 海鳴社
21. 鈴木情一 1986 「2歳児の比喩的再命名に関する日誌法的研究—標識化の発達—」 上越教育大学研究紀要 第5巻 p. 103-119.
22. 鈴木情一 1992 「2歳児の比喩的再命名に関する日誌法的研究—『基盤』の分析を中心に—」 上越教育大学研究紀要 第11巻 p. 71-85.

23. 渡辺 慧 1977 『認識とボタン』 岩波書店
24. ウェルナー・H. 1976 『発達心理学入門—精神発達の比較心理学—』 鯨岡 峻・浜田 寿美男共訳 ミネルヴァ書房
25. Winner, E. 1979 New names for old things. *Journal of Child Language*, 6, p. 469-491.
26. 山梨正明 1988 『比喩と理解』 認知科学選書17 東京大学出版会
27. 湯沢正道 1990 「階層的概念の理解の発達の変化」 教育心理学研究 38, p. 135-144.
28. 湯沢正道 1991 「幼児による階層的カテゴリーの状況的理解」 教育心理学研究 39, p. 373-381.

## Metaphorical Categorization of Association Responses and Their Developmental Change in Infancy

Seichi SUZUKI\*

The purpose of this study is an attempt to describe and categorize of an infant's association links in terms of various metaphorical thoughts, each of which is realized in the so-called metaphorical sub-types, such as *Metaphor*, *Metonymy*, *Synecdoche*, *Personification*, etc. .

For the purpose, one female infant's association responses, which were obtained with 20 *NOUN* stimulus words, were collected from her 1370-days of birth to 2676-days in every two weeks.

In this first report based on the longitudinal data, a theoretical consideration on the possibility was proposed, that it could analyze metaphorical sub-types into their cognitive-semantic meanings, and categorize association links by their meanings.

Furthermore some possible developmental trends of cognitive-metaphorical types were also proposed.

---

\* Division of Early Childhood Education